「共命(ぐみょう)の鳥～理性と本能を超える道」

●オノ･ヨーコさん

ジョンレノンさんが、1980年12月8日、凶弾に斃(たお)れて、40余年の星霜(せいそう)が過ぎました。暴力的な方法で、人間の存在が圧殺されるという出来事は、悲しみ、つらさ、いたたまれなさを残しました。しかし、また、人間は、そこから、改めて、向き合い、学び、新しい生き方を生み出すことを知ることにもなりました。

オノ･ヨーコさんの近著『今あなたに知ってもらいたいこと』(幻冬舎、2009年)に興味深い言葉がありました。夫のジョン･レノンさんが凶弾に斃れた後、彼女への誹謗が続きました。

「このままでは自分がだめになってしまう」と思って始めたのが、「人を『bless』(祝福)すること」だというのです。夜、ベッドの中で、自然に浮かんだ名前を祝福するのです。口をついて出てくるのは、自分に嫌がらせをした人たちの名前だったそうです。

1週間ほどして自分の気持ちに変化が表れ、恨みが薄れてきたと同時に、不思議なことに、自分を中傷していた人たちの鉾先が変わっていったというのです。

彼女は、自分の身体をさいなんでいたのは、「自分の中にある恐怖や怒りなのだ」ということに気づいたといいます。そして、「人のために祈っているつもりでいたのだけれど、それは自分の中にある恐怖や怒りを追い払うことだったのです。」とまとめていました。

●日本の出来事を振り返る

モリカケ、増税などが論議されながら、2021年衆院選で与党が圧勝しました。同時代に日本で選挙権を持つ人々の意識がどのように形成されているのかを深く教えられました。その後、財務省近畿財務局職員だった赤木さんの自死の問題を政権は取り上げようとしません。

2019年9月、東京電力福島第一原発事故で業務上過失致死傷罪で強制起訴された東電旧経営陣3名に、東京地裁は無罪を言い渡しました。今の日本の司法の方向を見せつけられました。昨年も、フクシマ原発の問題は司法でも曖昧なままです。

2019年10月、菅原経産相が公設秘書の香典疑惑で、河井法相は妻の選挙違反疑惑で、それぞれ辞任しましたが、説明責任は果たされないまま、辞任に至り、政権からの説明はありません。

2019年11月、例年開かれる首相主催の「桜を見る会」が、首相の後援会関係者が多数招待されていると批判を受け、政府は会のあり方を見直し20年度は中止すると発表して、その通りになりましたが、未だ説明はされていません。

2021年3月、スリランカ人のウィシュマさんが、名古屋入管で、謎の死を遂げました。その後、監視ビデオの内容が公開されるといわれていますが、結論は未だなにも明かされていません。

人びとが選んだ議員と政府によって、痛めつけられ、ないがしろにされる人びとが生まれ、また、暴力や暴言をふるう人たちがそこにはいます。しかも、その双方に、悲しみや愚かさが生まれていますが、そこに私たちの税金が使われています。

いずれも、問題解決されず曖昧なままになっている出来事を抱えるから心に残っているのかもしれません。

●共命鳥

広島の養専寺住職、私の義父、故･森重一成著『阿弥陀経のこころ』(施本、探究社)から抄出します。

共命という鳥は、顔は人面で、一つの身体に二つの頭があり、しかも、心も二つある鳥で浄土にいるといいます。

これは人間とは、一つの身体に、理性と本能という二つの側面を抱え、この二つの対立するものが互いに争うことに、その自分自身が悩む動物であるともいわれることを象徴的に表しているのだと示されています。

以下は、本願寺広島別院の出版物で紹介された文だそうです。同著から引用します。

「昔、多くの共命の鳥の中でも、とりわけ素晴らしい鳥がいました。
しかし、二つある頭のいずれもが、
『私の頭の羽毛は比類なく美しく、声も世界一美しい』
と確信し、自慢しました。
そして互いに憎み合い、争いあうようになり、遂には、
『片方さえ無きものにすれば、この私が世界一になれる』
と考えるに至り、ある日密かに毒を混ぜ、片方に食べさせました。
毒を食べた方は、もちろん亡くなりましたが、食べさせた方も体が一つですから、毒が回り亡くなってしまいました。
この愚かな事件があってから、お浄土の共命鳥は、
『他を滅ぼす道は、己を滅ぼす道、他を生かす道こそ、己の生かされる道』
と鳴き続けていると申します。」

そして、森重師は、「核兵器の競争に血道をあげる人類に聞かせたい言葉です。」と記しています。

●理性と本能を超える生き方

私が何かを間違いないといえば、必ず、誰かがそれは間違っているというのが世のならいだとお釈迦さまも、聖徳太子も示されています。実際、仏教そのものをめぐっても歴史には、そのように敵対する関係が生まれています。

八百年の昔、承元の法難(1207年)によって、専修念仏を正しいものだという立場に身を置く法然上人や親鸞聖人は流罪になり、四人の仲間の僧侶が斬首による死罪になりました。

念仏の教えに心を寄せるものならば、相手を憎むことは、本来はいけないことだと理性で分かりながらも、念仏を弾圧するものを憎み恨む本能の心が生まれてくるでしょう。

親鸞さまの手紙に次のような言葉があります。

「『この念仏する人をにくみそしる人をも、にくみそしることあるべからず。あはれみをなし、かなしむこころをもつべし』とこそ、聖人(法然)は仰せごとありしか」『親鸞聖人御消息』第六通『註釈版聖典』七四八頁

つまり、念仏する人のことを憎み謗(そし)る人(弾圧する人)であろうと、その人を憎み謗ることがあってはならないというのです。むしろ、そのように念仏を弾圧する人びとを、お念仏する皆さんがたは、「哀れみ、いとおしむ心を持ちなさい」と、法然上人は仰せになっておられましたよと、親鸞さまは、ご教示されています。

さらに、別のお手紙には、

「念仏を御(おん)こころにいれてつねに申して、念仏そしらんひとびと、この世･のちの世までのことを、いのりあはせたまふべく候ふ。(中略)ただひがうたる世のひとびとをいのり、弥陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはば、仏(ぶつ)の御恩を報じまゐらせたまふになり候ふべし。よくよく御こころにいれて申しあはせたまふべく候ふ。」同第43通『註釈版聖典』808頁

と示されます。

親鸞さまは、阿弥陀如来のみ教えに出遇えた皆さんは、その教えを深く心に受けとめて、寝ても覚めてもつねにお念仏を生活習慣として称えて、念仏の悪口をいう人びとの、この世と後の世の幸せを、お互いに祈り合ってください、そして、非業といい、間違った考え方にとらわれた世の人びと、つまり、念仏を謗る人びとが阿弥陀仏の御誓いを仰ぐ身になるように、とお互いに考え合わせてくださるなら、それは阿弥陀仏のご恩に報いることになるでしょう。よく心を込めて互いに念仏するのがよいでしょうと仰っています。

私たちは、自分に敵対する人、自分を悪く言う人の幸せを祈ることなど、とてもできませんし、想像もできませんでした。しかし、現実にそのように生き、その生き方を勧めてくださる方がたがいることに出遇えました。改めて、ご縁次第でどのような振る舞いもしかねない、お互い様だということを見つめたいと思いました。

私たちは、曖昧な出来事はどこまでもハッキリとさせながらも、敵対する関係となるのではなく、哀れみ、そして愛おしむ生き方を大切にする真の念仏を今年も大切にしていきたいと思います。

※『親鸞聖人御消息』第6通より　『註釈版聖典』748～9頁参照
※『親鸞聖人御消息』第43通より　『註釈版聖典』807～8頁参照

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた！　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか？　お待ちしてます(会費はいずれも資料･茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。